

令和 8 年 2 月 18 日

大阪市総合教育センター
教育振興担当 実践研究グループ
首席指導主事様

研究コース
A グループ研究A
校舎コード (代表者校舎の市費コード)
542090
選定番号
140

代表者	校舎名:	春日出中学校
	校舎長名:	永澤 良司
	電話:	06-6468-7371
	事務職員名:	石崎 伊織
申請者	校舎名:	永澤 良司
	職名・名前:	指導教諭・神近 篤志
	電話:	06-6468-7371

令和7年度 「がんばる先生支援」 報告書

◇「がんばる先生支援」について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	新規研究 (1年目)	
2	研究テーマ	非認知能力を核としたカリキュラム・マネジメントの推進 ～教科横断の視点から”心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力”を育む学校づくり～				
3	研究目的	1 「非認知能力の育成」を明確にカリキュラムマネジメントの中核に据え、教科を越えて共有可能な「育てたい力」として共通言語化し、各教科での授業実践に落とし込ませる。 2 教員間の対話と省察を通じて教育観の刷新を促すことで、結果として、より実効性の高い、持続可能なカリキュラムマネジメントへの進化 3 カリキュラムマネジメントを促進するために、「非認知能力の育成が必要であり」「非認知能力の育成を通じて、カリキュラムマネジメントの在り方そのものを再構築していく」という循環を作り出すこと 4 非認知能力を全教科共通の育成軸とすることで、中学校ならではの「教科の壁」を乗り越える自然な教科横断の視点が生まれ、教育課程のさらなる統合化・最適化が可能になる流れを通して、生徒には「心豊かに力強く生き抜く力」を、教員には「授業と学校を創る力」をそして学校全体には「本質的な学びのデザイン力」を育てていく。				
4	取り組んだ研究内容	いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSゴシック 9.5pt イント)				
		<p>1. 令和7年7月17日：基礎研修 ・ 講師： 徳留宏紀先生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ： 「非認知能力を伸ばすと何が変わる？」 ・ 内容： 非認知能力の定義、構造、授業での育み方についての講義が行われた。また、「チーム学校」として組織的に取り組む方法や、目指すべき最終目標の具体像が示された。 <p>2. 令和7年8月27日：実践構築研修 ・ 講師： 徳留宏紀先生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ： 「2学期以降の授業を描こう～ギミックを磨こう～」 ・ 内容： 非認知能力を向上させる授業には、「能動的・主体的・わくわく感」が不可欠であると定義された。授業で非認知能力を育成するための「ギミック」として以下の3つの要素が示された。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ リアリティ： 実生活との関連、本気度。エンタメ： ワクワク感、あそび心。 ◦ マッチング： 生徒の成長に最適な難易度。 ・ 活動： グループごとに自身の授業案をプレゼンテーションし、ギミックへの理解を深めた。 <p>3. 令和7年11月20日：授業検討と模擬授業 ・ 講師： 徳留宏紀先生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ： 「5人の授業を受けて、効果的なギミックとは？」 ・ 内容： 美術・英語・家庭科・社会 (2名) の計5名の教員が実践した授業のビデオや指導案をもとに、指導助言が行われた。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ ギミックのヒントは日常生活の中にあり、常にアンテナを張っておくことで見つかる。 ◦ 教科の壁を越え、他教科の実践を「角度の違う学びのチャンス」と捉えるプラス思考の姿勢が重要である。 ・ 体験活動： 教科横断的な視点を取り入れた体験型模擬授業「紙ぐるぐる」を実施。全員の協力が必要なワークを通じ、新たな視点で授業を考える契機となった。 <p>4. 令和8年1月7日：対話型研修 ・ 講師： 中山芳一先生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ： 「非認知能力の育み方～質問何でも受け付けます～」 ・ 内容： 一問一答形式で、現在・過去・未来にわたる幅広い質問に対し、講師の経験に基づいた回答が得られた。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ 主な質問例： 非認知能力に着眼した理由、学力向上との関連性、非認知能力が根付いた将来の社会像について。 <p>5. 令和8年1月27日：公開授業と総括 (1年間の集大成) ・ 講師： 徳留 宏紀先生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業名： がんばる先生支援事業 公開授業 ・ テーマ： 「非認知能力を核とした授業づくりを通して」 ・ 内容： 1年生の4クラスを対象に、英語・社会・美術・家庭科のモデル授業を公開した。各教科の特性を活かしつつ、1年間学んできた「ギミック」を盛り込んだ授業が展開された。 ・ 振り返り： 授業後の今年度最終研修にて、振り返りと次年度への課題についての確認の講義が行われ、1年間の活動の総仕上げとなった。 				
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	過去の	日程	令和 8 年 1 月 27 日	参加者数	約 35 名
			場所	大阪市立春日出中学校		
			備考			

6	成果・課題	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、「<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力</u>」の育成および「<u>教員の資質や指導力</u>」の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p>
		<p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>非認知能力を全教科の共通の育成軸とすることで教科の壁を乗り越えさせ、自然な教科横断的な視点が生まれ、教育課程の統合化、最適化が可能になる流れを通して心豊かに力強く生き抜く力が育かれていく。</p> <p>≪検証方法≫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非認知能力（やり抜く力、協働性、自己肯定感等）の向上 ・授業アンケートの前後比較（例：自己肯定感平均3.0→3.8） ・観点別ルーブリックによる評価と記録
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>【検証結果】</p> <p>「誰かの役に立ちたい」という項目における肯定的な回答は、R5年度89.6%→R6年度90.3%→R7年度91.3%と今年度も向上した。9割以上の生徒が自己有用感・自己肯定感を有している。</p> <p>【考察】</p> <p>授業実践：非認知能力の向上を意識した授業づくりと、生徒一人ひとりを承認する関わりが、自己肯定感の育成に直接寄与した。</p> <p>多角的な指導：生活指導や部活動において「自分と向き合う・高める・他者とつながる」の3本柱を徹底した結果、生活の安定や記録向上といった具体的成果を創出し、前向きな行動変容へと繋がった。</p>
		<p>【見込まれる成果2】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>非認知能力育成の取り組みの一環として教科横断的な授業を組み入れることにより、教育課程のさらなる統合化、最適化が可能になり各教科の授業力の向上と一人ひとりの教員が学校を創る力を学びのデザインとして共通認識ができる。</p> <p>≪検証方法≫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業設計力、省察力の向上、共通言語での対話の深化 ・視察レポートや協議記録を基にした定性・定量の分析 ・教科横断的な連携による次年度のカリキュラムマネジメント再設計力の向上
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>【検証結果】</p> <p>多角的アドバイスによる深化：夏季課題として考案した「授業のギミック」をグループワークで検証した結果、他教科の視点が加わることで当初の案に「プラスα」の創意工夫が生まれ、質が向上した。</p> <p>ギミックの直接体験：研修内の「共通項を見つけ確認し合う」活動自体がギミックとして機能しており、参加者自身の心を躍らせる体験を通じてその有効性を確認した。</p> <p>外部知見の活用：研究指定校の視察報告により、具体的な課題解決アプローチや新たな教育的知見が共有された。</p> <p>【考察】</p> <p>教科横断的アプローチの有効性：教科の枠を超えた対話が、生徒の「わくわく」を引き出す独創的なアイデア創出に直結することが示唆された。</p> <p>主体的・建設的な授業改善：実体験に基づく納得感と視察による客観的知見が組み合わせることで、単なる手法の導入に留まらない、生徒主体の授業づくりに向けた建設的な議論へと発展した。</p>
		<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>非認知能力を軸とした教科指導と学年運営による認知能力の可視化。非認知能力の向上による認知能力の向上。</p> <p>≪検証方法≫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非認知能力の向上が見られたグループと低いグループの定期テストの平均点の差の推移
<p>[検証結果と考察]</p> <p>【検証結果】</p> <p>非認知能力の変容：事前調査で課題であった「自分と向き合う力（自制心）」に加え、「自分を高める力（向上心、楽観性）」において顕著な数値的向上が見られた。一方で、元々高水準であった「他者とつながる力」は、事後も高い傾向を維持している。</p> <p>学力との相関：定期テストの平均点推移においては、非認知能力の伸びと連動した明確な有意差は確認されなかった。</p> <p>【考察】</p> <p>授業を通じた意識付けにより、生徒の内面的な資質（非認知能力）にポジティブな変化をもたらすことができた。テスト点数に即時的な反映が見られなかったのは、非認知能力が「学習に向かう土台」として機能し、認知能力（学力）の定着へ寄与するまでには一定の期間を要するためと考えられる。</p>		

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>非認知能力の理論理解、実践や先進的に取り組んでいる学校の視察などを通して、自校の教職員に研修で落とし込んだり、学んできたことを共有する場面を作る。</p> <p>《検証方法》</p> <p>教職員研修においてアンケート作成し、今後の教育活動の参考になったという項目で肯定的意見を80%以上にする。</p> <p>[検証結果と考察]</p> <p>検証結果</p> <p>意識面：非認知能力を伸ばす授業の有効性については、教員全員（100%）が肯定している</p> <p>実践面：一方で、自身の実践可能性について不安を持っている意見が一部の教員からみられた。</p> <p>行動変容：自身の授業が「ギミックの導入」に留まり「意図的な働きかけ」が欠けていたと自覚した教員には、授業改善への前向きな変化が見られた。</p> <p>考察</p> <p>教員は非認知能力の重要性を十分に理解しているものの、「理解」と「体現」の間に大きな乖離がある。これは、単なる手法の模倣から、能力向上を目的とした意図的な指導への転換に課題があることを示唆している。今後は、具体的な指導のイメージを形にし、「これならできる」という自己効力感を高める支援が不可欠である。</p>
---	-------	--

6	研究全体を通じた成果と課題	<p>【研究全体を通じた成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>成果</p> <p>1年間の研究は、教員が自らの実践をメタ認知し、非認知能力向上のための具体的な手立てを「活用（Lv3）」ができる段階にまで押し上げた。徳留先生の指導講評は、現状の肯定に留まらず、次のステップ（分析・評価・創造）への道筋を示すものであった。</p> <p>課題</p> <p>今後は、本研究で得られた知見を基に、個々の「授業」の質を向上させるフェーズから、学校全体として非認知能力を育む「カリキュラム・マネジメント」のフェーズへと移行する必要がある。教師一人ひとりが自らの現在地を常に問い直し、より高次のレベルを目指して授業を創造し続ける姿勢こそが、生徒の非認知能力を最大化する鍵となる。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>非認知能力の向上を核とした授業改善により、変化の激しい未来社会を生き抜くために必要な資質・能力を育む上で、非常に重要な方向性を示すことができた。認知能力と非認知能力の統合的な育成は、生徒たちが将来の困難を乗り越え、自らの目標を追い続ける力を養うことにつながっている。学校が時代に合わせて進化し続けるためのモデルケースとして、今後も継続的な実践と成果の発信の必要性を感じるものであった。また、教員の授業に対する意識改革にもつながり、専門性を深めていくことや一つの授業に対する考え方にも大きな影響を与えることができた。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>
---	---------------	---

--	--	--